

◆『カナダ移民のパイオニア 佐藤惣右衛門物語』を兄、夫、妹の三人共著で出版してから三年半。故郷登米市（宮城県）の両親の眠る墓所にきょうだい達で小さな記念碑を建てた。子ども頃、敗戦後の貧しい田舎の暮らしに、カナダのソーエモンオジサンから良い香りのする赤や黄色のキャンデーや、古着の美しい子供服などが届き、遠い夢のような豊かな世界を教えてくださいました。祖母の兄佐藤惣右衛門は、明治中期十八歳でカナダに渡り苦勞の末に塩鮭の製造輸出などで成功し、冷害や飢饉に苦しむ村人たちを呼び寄せ故郷への送金を可能にした。『加奈陀同胞発展大鑑』は「成功五人男」に「君は一人貪らず先ず人を達せしむ」と記す。

昭和十六年、日本の真珠湾攻撃で敵性外国人として市民権剥奪、強制移動という苦難にあい、庭師や教会活動などをしながら、敗戦祖国の妹（私の祖母）家族を案じてあのキャンデーは送ってくれたものだった。夫たちの十五年に及ぶ調査研究によって、初めて大伯父の成功と、戦争によってすべてを奪われた人生を知った。この本は昨年の日本自費出版文化賞（部門入賞作品）に選ばれた。

登米市に到着して気付いたら、右耳の補聴器が失くなっていた。眼鏡、マスク、補聴器と三重に耳に掛けるため、どれかを外すときに落としがちなのだ。昼食をとった福島駅が最も可能性の高いと、ダメもとで係へ問い合わせたが無し。両耳特価の四十六万円つまり片耳二十三万円。箱入りならともかく、片耳一つ落ちていたとしても体に装着するものを拾い上げ届ける人は稀だろう。今後は拾ったら届け出ようと身に沁みて思った。

梅津純子

◆映画館フォーラム山形では久しぶりに観たいものが続々と上映予定で、スケジュール表を見るのが楽しみです。上映一週間が多く、チェックしてもなかなか観られないのが残念。先日鑑賞したスペイン映画「太陽と桃の歌」は、果樹園を取り上げられた三代続く桃農家の、最後の収穫までの苦悩の日々を描いています。深刻な状況なのに、太陽の国の農民は遅く明るく、時に大勢集まって大いにしゃべり飲み歌い踊る……雪に閉ざされた者のやつかみもありか。大雪を口実に、また、国内外の不穏な報道の数々に辟易して、心身共に閉じ籠りがちです。ところで、意識して以来六十余年、給食以外避けてきたニンジンが、突如苦にならなくなりました。味覚の広がりはたまた味覚の鈍化？ いずれ、いまだこんな変化に出会うとは、この冬のごく個人的なプチエポックです。

大橋千佳子

◆ここに来てまだ乗り通していない首都圏の私鉄に乗りについている。私鉄で路線の長さでは関東屈指の東武鉄道、その東京スカイツリーラインに乗った。支線もあるが、いろいろ乗り継ぎの線

(日比谷線、半蔵門線、直通運転)があるので、各停で通して乗るにはやや複雑、終点もそれぞれ列車ごとになる。

曳舟から終点の亀戸までには、支線見当の亀戸線がある。折り返しワンマン2両編成で、のり継ぐことになった。亀戸駅で初めて下車、梅まつり中という亀戸天神に寄ることにした。白梅が目につく。池には亀がいたが、鷺がうごかずそれに鯉が群がっていたのが不思議。亀戸天神は、梅ばかりでなく藤が有名なよう。藤棚があった。近くの普門院に左千夫の墓を探して、これは少し手間取ったが、墓所のすみにネットでもみるやや勝手な書体の墓をみる事ができた(中村不折筆)。案内が近づかないとないので、墓地内をよくよく歩くことになった。左千夫を一通り読んでいた頃があった。のり鉄では、余り下車することはないが、本数が多い首都圏、下車することにしたものの。左千夫の歌を引く。

亀井戸の藤も終りと雨の日をからかさしてひとり見に来し

小野澤繁雄

◆昨年は異常に雪が少なく、こんな冬でいいのかと思わせるような陽気だった。今年の冬は立春寒波節分寒波が立て続けに襲い、家の周辺に雪の捨て場がなくなった。ここから少し山に住んでいる人に聞いたら、もう二回雪下ろしをしたとのことだった。幸い三月の声を聞き始めた頃から日差しが柔らかくなり、雪解けが急に進んできた。そろそろ絹莖の芽出しの準備をしてみようかという気分にもなってきた。

「春めくや蛇腹広ぐる手風琴」

神村ふじを

◆立冬まで穏やかに過ごしたこの冬は、冬將軍の逆襲を受ける状況です。最強、最長寒波は災害級の猛威でも、太平洋側は乾燥注意報程度続いているが、危険でもある。下町育ちの私は火事が怖い。山火事もハワイやロスアンゼルスばかりでなく、岩手・大船渡にも。江戸の大火とて人知を超える。日本の多種多様な災害への心構えは怠りなくありたい。

河村郁子

◆長く居座った冬將軍がやつと去ったようだ。昨年は里に雪がまったくなかったせいもあり、この冬の雪の多さと寒さには悲鳴を上げた。仕事と雪かきと、その合間にちよつとだけ読書の二ヵ月だった。白鷹町立図書館の新刊コーナーに、アレクセイ・ナワリヌイ著の『パトリオット』を見つけた。早速借りて四週間かけて読み終えた。しんどかった。特に獄中で書いた手記が。ナワリヌイはプーチンがもつとも恐れた政敵と言われている。昨年二月十六日に極北の刑務所で亡くなった。プーチンは殺害命令はしていないと報道されているが、殺されたのだと私は確信している。この本にナワリヌイの美しい文章があるので、紹介したい。「私はロシア語が好きだ。どこか物憂げな風

景も好きで、窓から眺めると、なんだか泣きたい気分になる。ただただひたすらすばらしい。気分が上々になるのは、こうしたものがすべて身近に感じられるからだ。ロシアの悲しい歌も好きだ。ロシアの文学や映画も好きだ。どれも必ず、苦悶や沈思、苦悩、憂鬱、自省に触れている」。もう一冊、胸を衝かれたのが、吉田千亜著『孤塁 双葉郡消防士たちの3・11』。原発事故の最中、命がけて救助や火災対応に当たった消防士二五人の物語である。こんなに泣かされた本はかつてなかった。悲しいのではなく「悔し涙」であった。

新野祐子

